

THE MOON ART CONTEST VOL.20

月のアート展

受賞作品 ご紹介

会期：2025年9月13日～10月5日

けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都芸術大学 名誉教授 柴田純生 先生

京都芸術大学 油画コース教授 奥田輝芳 先生

審査員 最優秀賞



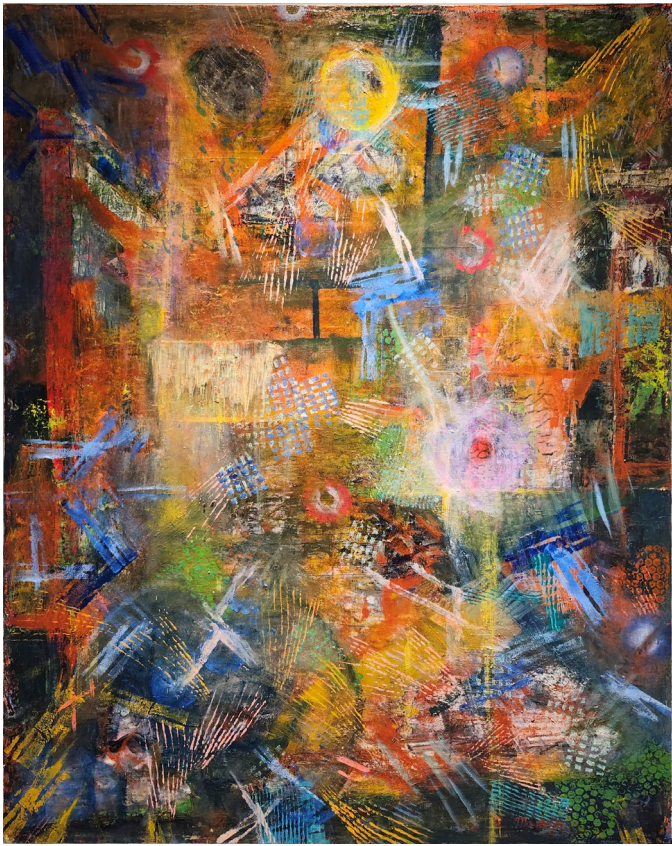
『月の調べ (Moonlight Sonata)』

イシバシオサム

【審査評】

障子や襖は日本家屋の伝統的様式です。光の取り込み、空間の仕切りなどその機能性に加え、なにより情景豊かな面持ちがあります。作品の支持体にはもってこいの対象でしょう。この作品はその対象の平面性の上に、立てや横また奥行きやねじれの位置などを意識した構成的な組み立てが特徴です。その表面は多彩な装飾性と光の透かしや反射を取り入れたさまざまな視覚効果があり、いろいろに鑑賞の楽しみを与えてくれます。しかしながら音をテーマにした本物のギターや弦と水道の蛇口のおもちゃ、そしてそこからの実際の音は効果的なものがあるいは遊び過ぎなのか。意見が分かれところですが、いずれであれその遊び心が制作の原動力であることは間違いないことでしょう。

審査員：柴田純生



『夜の街』 三浪 眞代

【審査評】

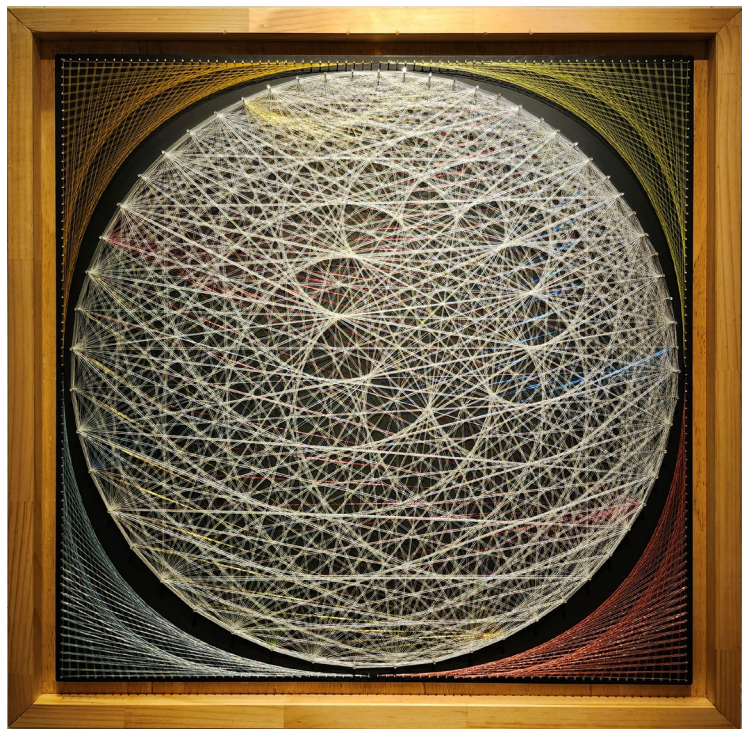
複雑な色相の組み合わせが夜の街を彩っている情景を表現された作品です。ひょっとすると、夜の街の情景は月を描くための状況作りかもしれませんがこの作品の見所はやはり色彩です。非常に多くの色彩が使われていますがこの作品にはオールオーバーのまとまりがあります。それは強い対比が視覚に訴えるいわゆる補色対比の効果や、細い線の集積でできる色の並置混色の効果が画面全体を支配しているからです。色彩には色相、明度、彩度という3属性がありそれらをトーンごとに分けた表があります。トーンの組み合わせ方や色彩の面積比、普段から衣服を考える時の差し色などの効果、アクセントカラーなどを制作に使うとまた違ったメリハリのある作品になります。制作途中で写真を撮りモノクロームに変換し、明度の高いところ、低いところ、またその時に見える形、中間トーンを増やしたり減らしたり、と様々な方法で作品を構想することができます。抽象画はこういった絵の基準になる色彩配置や線や面の造形要素、直線や曲線といった自由形態の使い方など無限にあり、そこに作者の個性も生まれてきます。ちょっと長くなりましたが三浪さんの制作は本格的な絵画ですからこれらも堂々と制作して下さい。

審査員：奥田輝芳

【審査評】

ストリングアート（糸かけアート）の作品です。画面全体は90センチ正方ほどありストリングアートとしては大きいサイズです。そのためこの制作の労はかなりのものでしょう。中心性の強い画面が特徴のストリングアートですがこの作品ではあえて中心をずらした花柄の幾何模様を実現しています。糸の色使いにも多彩な工夫が見られます。その糸の総延長は1500メートルにも及んだそうです。ストリングアートは癒しの効果があるといわれますが今回はどうでしたでしょうか。幾何学的、立体的、あるいは自然な形態とさまざまなストリングアートが存在しますが、今後どのような方向を目指すのかその展開が楽しみです。

審査員：柴田純生



『雪月花』 鳥元哲哉

審査員 特別賞



『スーパームーンにであえた魚』
和和（かずわ）

【審査評】

月のアート展だけでなく様々なコンペティションでは、パワフルな作品やとんでもない発想が新鮮で人目を惹き、支持を集めることがあります。確かにこの作品の面白さは、少しだけそういった目新しさが魅力となっています。ただこの作品はそれだけではなく海に浮かぶ月を表現するために、波の模様の着物を選び、手の込んだ刺繍を施し強烈な月を表現するための黄色い布を縫い合わせ存在感のあるフォルムに仕上げています。作者の直感で捉えた素材の選択と、月というテーマの関係がちょうどしっくりきたのです。まだ荒削りなところはありますが技巧に走らず素朴で力強い感性を頼りとした制作を続けていただきたいと思います。

審査員：奥田輝芳